

令和3年度 第35回入学式式辞(2021.4.7)

朝の日の光に力強さを感じます。吹く風はまだ冷たいですが、「篠路」の地にもようやく春が訪れました。

この大切な日、PTA会長 津島 文(つしまふみ)様、そして保護者の皆様のご臨席を賜り、ここに一六三名の新生を迎え、第三十五回入学式を行うことができますことに、心から感謝し、厚くお礼申し上げます。

新生の皆さん、入学おめでとうございます。 昨年の初め、世界は突如として新型コロナウイルスという未知の敵との戦いを余儀なくされました。この厳しい状況の中、皆さんは小学校での最後の一年間、我慢や辛抱を強いられながらも、学級の仲間や友達と支え合いながら、授業や学校行事に前向きに取り組んできたと聞いてます。最上級生としての自覚をもち、立派に頑張ってきた自分と仲間をどうぞ誇りに思ってください。私たち篠路西中学校の教職員、そして生徒一同は、そんな皆さんの入学を、心から歓迎します。

さて、新生の皆さん、私は一年間のスタートにあたり、本校に関わる人なら誰でも唱えられる篠路西中学校のスローガンを掲げようと考えました。それは「自立貢献」です。

「自立」とは「自分の足で立ち、自分で考え、自分のことは自分で判断決断する」ということです。「貢献」とは「自分にできることは何なのかを考え、思いやりの心を持ち、人の役に立とう」と思うということです。私は、今後このスローガンを皆さんにも大切にしてほしいと考えています。

そこで、皆さんには、「自立貢献」を目指すにあたり、お願いしたいことを二つ伝えます

一つ目です。皆さんは、「トムソーヤの冒険」という物語を知っていますか。これは今から百三十年以上も前に少年少女向けに書かれ、今でも本屋の店頭に並ぶ息の長いアメリカの冒険小説です。この作者であるマーク・トウェインは若者たちに次の言葉を残しました。「やったことは例え失敗しても二十年後には笑い話にできる。しかし、やらなかったことは二十年後には後悔するだけだ。」

私は、中学校に入学した時、野球が大好きで野球部に入部するつもりでした。でも、練習を見学した時、先輩方の気迫あふれる取組を目の当たりにし、練習についていく自信がもてず、悩んだ末にやめてしまいました。結局、中学校時代は真剣に打ち込むことは何も見つからず、あの時、野球部に入部していたら、きっと大きく人生が変わっていたのではと今でも後悔しています。

皆さんには私のような後悔はしてほしくありません。どうぞ、積極的に新しいことやワンステップ上のことに挑戦してみてください。たとえ失敗したり上手くいなくても、その経験は皆さんを一回りも二回りも大きくしてくれます。人は未知のことに挑戦してはじめて、成長するのです。

二つ目です。皆さんは、自分がこの世に生を受ける確率について考えたことはありますか。

医学的に単純に計算しただけでも実に“五十～八十兆分の一”なのだそうなのです。ここには両親の出逢う確率は入っていません。到底正確には計算できることはできない、まさに「神の領域」なのです。皆さんは、家族や関わってきた人たちにとって、唯一無二のかけがえのない存在です。どうぞ、自分自身を大切にしてください。人は決して一人で生きることできません。様々な人たちと関わってはじめて自分の足で立つことができます。小学校と中学校にはたくさんの違いがあります。戸惑ったり、困ったりすることもたくさん出てくることでしょう。そんな時、決して一人で悩んだりしないでください。家族や友達、そして先生方に相談してください。必要な時に人を頼ることは「自立」へとつながっていくのです。

さあ、中学校生活がスタートします。新しい学級、授業、学校行事、委員会活動や部活動…信頼できる仲間や友達をつくり、新しいことにチャレンジする機会が皆さんを待っています。自信なんて必要ありません。少しの勇気をもって新しいことに飛び込み「自立貢献」を目指してくれることを願っています。

保護者の皆様、改めましてお子様のご入学おめでとうございます。

お願いがございます。新型コロナウイルスの終息は、未だに予測がつきません。私どもは、子どもたちの健康や安全を守ることが、第一の責務と認識しております。暫くの間、子どもたちには我慢や辛抱を強いることとなります。全国的にこのような状況をストレスに感じ、心が折れてしまう子どもたちが増えているとの報告がありました。思春期は心身共に大人への大切な過渡期でもあります。そんな子どもたちを私ども教職員一同、心を一つにして、誠心誠意、育て参りたいと思います。ご家庭におかれましても、これまで以上にお子様と接する時間を大切に、共に手を携えて見守っていただければ幸いです。

本校の教育活動へのご理解とご協力、ご支援を賜りますことをお願い申し上げ、式辞といたします。

令和三年四月七日
札幌市立篠路西中学校
校長 飯間 博幸